

8 技術・家庭科教育研究部

部 長 赤堀 信二

副部長 溝垣 文宏
増田 裕子

1 研究経過のあらまし

県の研究方針を受け、研究テーマを「学びをつなげることを通して、実践的な態度を育てる授業」とし、授業研究に取り組んだ。技術分野では、夏季研究大会及び令和5年度の全日本大会に向けて内容Cを中心に、家庭分野は令和6年度の夏季研究大会に向けて内容Aを中心に授業実践や指導案検討会などを通して研究を進めた。

2 今年度のあゆみ

期 日	会 合 名	会 場	内 容
6月7日 (火)	第2回実技研修会	小笠教育会館	組織の確立、本年度の研修の方向性の確認、年間計画の立案
8月3日 (水)	静教県夏季研究大会	技術：伊豆市韮山中学校	内容Cについて口頭発表
		家庭：掛川市立北中学校	研究大会にズームで参加視聴
8月5日 (金)	技術・家庭（家庭分野）研究推進委員会	御前崎市立浜岡中学校	内容Aの題材構想研究
8月8日 (月)	第3回実技研修会 （技術分野）	掛川市立北中学校	県教研発表の報告・ 内容C教材研究
9月12日 (月)	技術・家庭（技術分野）公開授業	学校組合立御前崎中学校	内容A～オリジナル家具の評価～ 公開授業参観
9月14日 (水)	技術・家庭（技術分野）公開授業	掛川市立西中学校	内容B～リーフレタスに適した栽培方法は 何だろう～公開授業参観
11月4日 (金)	技術・家庭（家庭分野）研究推進委員会	小笠教育会館	内容Aの題材構想研究
11月9日 (水)	一斉研究報告会	掛川市立北中学校	公開授業研の振り返り 来年度全国大会発表に向けて
		菊川市立小笠南小学校	小学校の公開授業研に参加
11月29日 (火)	技術・家庭（家庭分野）公開授業	御前崎市立浜岡中学校	内容A～中学生の力を地域に届けよう～ 公開授業参観
2月末	第4回実技研修会	小笠教育会館	次年度に向けて研究について共有

2 今年度のあゆみ

(1) 技術分野

ア 令和5年度全国教研静岡大会に向けて

令和5年度全国教研での発表に向け、「C エネルギー変換の技術」についての研究を進めた。A・B・C・D、全ての内容に関わる「リーフレタス栽培を題材とした複合教材」と「発電シミュレータ」を軸に、小笠地区全体として取り組んでいくことを確認した。

イ 夏季研究大会での発表

夏の研究大会では、掛川北中学校の岡田教諭他代表3名が会場において小笠地区の現状と取組を中心に発表した。他地区からの関心も高く、多くの質問があがった。代表以外はオンライン

ンでの参加となった。

(2) 家庭分野

ア 内容Aにおける研究推進

・「家族・家庭や地域との関わり」における地域を巻き込んだ題材計画の立案

イ 夏季研究大会への参加

・掛川北中学校を会場に実技研修会を兼ねて内容Aにリモート参加（参加者10名）

ウ 技術・家庭科（家庭分野）公開授業 11/29（火）浜岡中学校 柴田 梢 教諭（参加者7名）

・内容A 家族と家庭生活 ～中学生の力を地域に届けよう～「御前崎しあわせ創造プロジェクト」



3 一斉研修報告会

(1) 技術分野

ア 公開授業の事後研修

事前に行われた公開授業を振り返った。ものづくりを設計で締めくくることが学びを次へとつなげていく栗田教諭の実践や、気温や照度のデータをもとに、レタス栽培の生育環境を考える小関教諭の実践など、今後の授業づくりの参考となる多くの情報を得ることができた。

イ 各校実践報告

掛川東中学校山内教諭が見学した千葉大学植物工場拠点に関する報告を行った。日本社会における栽培の現状や植物栽培工場の最新情報など、有益な情報を得られた。

ウ 指導助言

静岡大学教育学部の改正清広准教授から指導と助言をいただいた。本地区で行われている実践と、環境問題や災害対応などを関連づけたお話を聞くことができ、本地区の研究を今後発展させていく新しい方向性や可能性を見いだす機会となった。

(2) 家庭分野

小中合同開催（小学校公開授業研への参加） 中学校参加者：4名 小笠南小学校にて

内容：内容A「気持ちがつながる家族の時間」の公開授業と研究協議及び指導講評（静岡大学 小清水准教授）

4 成果と今後の課題

(1) 技術分野

現在研究している実践を小笠地区全体としての取組としていく流れは順調に進んでおり、各研修会などを利用して共通理解や疑問の解消も図ることができている。しかし、免許外や非常勤の技術科担当にとっては難易度が高い部分もあり、今後、教材や実践の普及を進めるにあたり、検討していく必要がある。

(2) 家庭分野

令和6年度の静教研発表に向けて、研究分野の内容Aについて研究推進をすることができた。また、浜岡中学校の公開授業を参観することで、題材の研究について小笠地区の技術・家庭科担当者で共有することができた。次年度は、この実践を土台とし、題材計画を検討していきたい。

小中学校合同開催での一斉研究報告会では、小中の系統性を確認するとともに、講師の小清水准教授から、家庭科の授業づくりについてご教示いただき、大変充実した研修会となった。今後もこうした研修の機会を設定できるようにしていきたい。

9 小学校家庭科教育研究部

部長 石山 千夏
 副部長 高坂 和恵
 副部長 大石 多香子

1 研究過程のあらまし

静教研小学校家庭科部の研究テーマ「学びをつなげることを通して、実践的な態度を育てる授業」を受け、本研究部では、今年度は特に「つきたい力を明確に押さえ、子どもが主体的に取り組むためにより効果的な学習活動を仕組む」と「年間を見通し、各題材の学びがつながるような題材構想を考える」の2点を研究し、令和5年度の静教研における内容A「家族・家庭生活」の発表に向け単元構想や授業研究等の研修を行った。

2 今年度の歩み

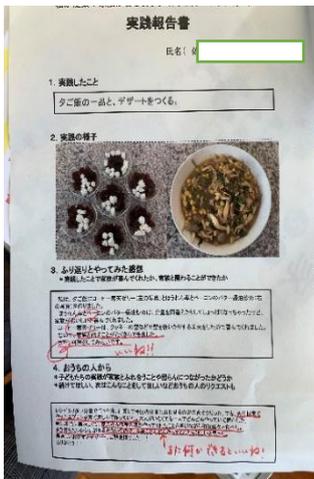
日時	事業	会場	内容
5月10日(火)	小笠地区研究推進委員会①	小笠教育会館	今年度の活動計画、取組
5月18日(水)	静教研研究部会①	各学校(WEB開催)	研究方針・夏季大会について
7月5日(火)	小笠地区研究推進委員会②	小笠教育会館	研修の方向性、単元構想
8月3日(水)	静教研夏季研究大会	各学校(WEB開催)	県の研究発表、助言等視聴
9月8日(木)	小笠地区研究推進委員会③	小笠教育会館	単元構想、指導案の検討
10月13日(木)	静教研研究部会②	静岡県教育会館	夏季大会の成果と課題
10月20日(木)	小笠地区研究推進委員会④	小笠教育会館	単元構想、指導案の検討
11月9日(水)	一斉研究報告会	小笠南小学校	授業者 東本 みゆき 教諭 題材名 気持ちがつながる家族の時間
1月20日(金)	教育研修代表者会	小笠教育会館	反省・次年度の計画
2月7日(火)	小笠地区研究推進委員会⑤	小笠教育会館	研究及び実践のまとめ

3 一斉研究報告会

- (1) 期 日 令和4年11月9日(水)
- (2) 会 場 菊川市立小笠南小学校 5年
- (3) 参加者 22名
- (4) 事後研から(成果と課題)



成 果	課 題
○実践をしてからの話し合いの授業だったため、みんなが自分事として参加できた。 ○家庭と連携し、実践した後に家の人からのコメントをもらうことで、より子どもたちのやる気につながった。 ○ICTを活用すること(ジャムボードやスライド)で、自分が実際作ったものや活動したものを写真で見せることができ、相手に伝えやすく課題も共有しやすかった。 ○評価基準(ルーブリック)に対して子ども自身がどこを目指しているのか自覚できていた。	▲せっかく、お家の人からのコメントがあっても、対話の時に活かせなかった。(今回の授業の時は、紙にプリントアウトしておいた方が共有しやすかったのではないかな) ▲学習問題の「よりよく」を目指して対話を設定しているのだから、似たような課題を持ったグループを作るなどした方がもっと学びが深まったのではないかな。 ▲家の人からのコメントをもっと活かした方が、「よりよく」につながるのではないかな。

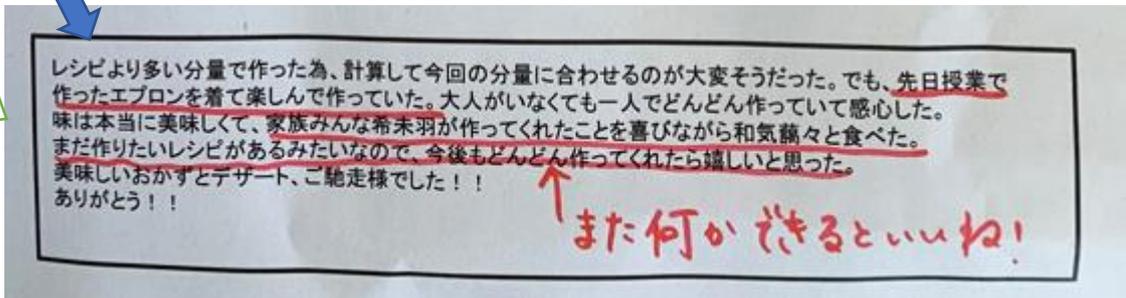


(5) 助言者から (静岡大学 小清水 貴子 准教授)

- ・保護者のコメントは宝。このコメントをもっと活かすことができたのでは。
- ・「行動して良かった。」という達成感、満足感、自己肯定感が大切。
打ち上げ花火 → 線香花火 (無理なく、持続可能な行動へ)
- ・『なぜ、家族と団らんする必要があるのか。』は、本質的な問いであり、特別なことではなく日常。
- ・家族のためにだけではなく、自分も家族の一員であると自覚することが大切。
- ・Aの領域が全体の軸となる。その上にBやCがある。だから、いろいろな領域を融合させると深まる。



保護者のコメント



家族をよりよくする

自分にとってのより良さ

個別 最適化!!

4. 成果と今後の課題

前年度 (Aの領域で授業を組み立てることが決まって) から、さまざまな授業構想を研推の中で話し合ってきた。課題は、たくさんあったが中でも①「団らんとは何だろう。」②「どの単元で研究テーマをもっと深めることができるか。」の2点がなかなか解決できなかった。

①については、小清水先生の助言により、「団らん」はより日常になるようにすることが目的であって、自分も家族の一員であるということを実感して取り組んでいくことが大切だとわかった。そのことから②のことを考えると、Aの領域は全体の軸となるので、年間を通じて取り組んでいくことが大切となる。一つの単元だけでなく、家庭科の授業2年間を通してストーリーを考える必要がある。

また、今回は中学の先生とも一緒に考える機会をいただき、さらに勉強になった。

そこで今回の授業や中学の先生からのアドバイスから2年間のストーリーを考えた。

日常化!

5年	①わたしの生活 大発見	②おいしい 楽しい調理	③ひと針 に心をこ	④持続可 能な暮ら	⑤食べ て元気	⑥物を生か して住みや	⑦気持ちに つながる家 族の時間	⑧ミシン にトラ
→ いろいろな仕事に挑戦!!								
6年	⑨見つけ てみよう 生活時間	⑩朝食から 健康な一日	⑪夏を涼 しくさわ	⑫思いを形 にして生活	⑬まかせて ね今日の食	⑭冬を明るく 暖かく	⑮あなたは家庭 や地域の宝物	
→ 自分の仕事の自慢を増やそう!								

Aの領域は、全体の軸。今後は上記の表のように、自分が家族の一員として自覚できるような授業を提案できるようにしていきたい。さらにその後の中学、高校も見据えて考えることで、Aの領域「家族・家庭生活」が土台になって、実践的な態度が育つように働きかけたい。

10 英語教育研究部

部長 小関 昌典
副部長 竹内 洋介
副部長 井浪 貴斗

1 研究経過のあらまし

(1) 研究テーマ

小・中9年間を通してたくましく英語を学ぶ生徒の育成を目指した授業作り

(2) 研究テーマ設定の理由

小学校は2020年度、中学校では2021年度から新学習指導要領が始まった。加えて、GIGAスクール構想のもとに1人1台iPadなどの端末が貸与され、ICTを効果的に活用した新しい学びのスタイルが模索されている。

本研究部ではこれまで、小学校と中学校の連携をテーマに研究を進めてきた。小学校高学年で教科としての英語を教わってきた児童を、中学校でどのように受け入れ、日々の授業を実践していくべきかが協議され、スムーズな接続のための取り組みについて考えていく必要がある。

以上の理由から、本年度は上記の研究テーマを設定した。

2 今年度のあゆみ

日時	会合名	内容
5月10日(火)	第1回研究推進委員会 (小笠教育会館)	○組織確認 ○研究テーマ確認 ○本年度の活動について
6月10日(金)	第2回研究推進委員会 (小笠教育会館)	○一斉研内容検討 ○静教研について
6月13日(月)	小笠地区中高連絡協議会 (掛川西高校)	○授業公開 ○事後研修
7月4日(月)	第3回研究推進委員会 (小笠教育会館)	○一斉研について(テーマ別研究報告の内容検討) ○静教研内容検討
8月4日(木)	静教研夏季研究大会 (オンデマンド)	
9月5日(月)	英語話し方能力研究大会 小笠地区大会	○各校1名の生徒代表者による英語スピーチの発表
9月20日(火)	英語話し方能力研究大会 中部地区大会	○中学生による英語スピーチの発表 小笠地区から4名出場
9月26日(月)	第4回研究推進委員会 (小笠教育会館)	○一斉研について(テーマ別研究)
9月30日(金)	英語話し方能力研究大会 静岡県大会	○掛川東中学校 望月 亮宏さんが出場
11月9日(水)	一斉研究報告会	○テーマ別研究報告(ブース発表)
12月	第5回研究推進委員会 (小笠教育会館)	○一斉研の反省

3 活動報告

(1) 令和4年度 小笠地区中学校英語話し方能力研究大会

ア 日時 令和4年9月5日(月) 小笠教育会館 2F大会議室

イ 参加者および発表内容

No.	学校名	氏名	学年	種別	タイトル
1	岳洋中	松永 柊	3	自作	Should We Learn English?
2	桜が丘中	新倉 大樹	3	自作	Smaller Sizes, Bigger Problems
3	栄川中	近藤 結理	3	自作	Live and Care
4	城東中	梶山 さくら	3	自作	Gender Equality
5	菊川西中	細野 珠己	3	自作	What is "normal" ?
6	菊川東中	田村 唯羅	3	自作	"Atar imae" and Happiness
7	原野谷中	深田 瑛駿	3	自作	No School, No Life?
8	大須賀中	八木 新菜	3	自作	Planet of Plastic
9	掛川東中	望月 亮宏	3	自作	Finding Freedom from Gender
10	浜岡中	木村 幸愛	3	自作	Do you know the SDGs?
11	掛川北中	水井 悠人	3	自作	Our World Needs Our Help
12	大浜中	赤堀 蓮	3	自作	7.8billion personalities
13	掛川西中	森田 露乃	3	自作	Meaningful Travel
14	御前崎中	増田 りか	3	自作	Supercalifragilisticexpialidocious Time

ウ 審査員 齋藤 杏菜教諭(小笠高等学校) Williams Melissa Anesha 先生(池新田高等学校)

エ 結果 本年度は、掛川東中学校 望月 亮宏さんが県大会出場

(2) 小笠地区中高英語教育連絡協議会

ア 日時 令和4年6月13日(月) 静岡県立掛川西高等学校

イ 内容

(ア) 公開授業 コミュニケーション英語 I

(イ) 研究協議

(3) 一斉研究報告会

ア 日時 令和4年11月9日(水) 掛川市立上内田小学校

イ 方式 参集型ブース別発表

ウ テーマ別研究報告

(ア) A 「小中連携(情報共有の仕組みづくり)」

小中間での連携が進んでいないのではないかという仮説の基、小中の教員にアンケートをとった。小学校では、外国語を担当する専科教員や教科担任が徐々に増え、外国語を担当しない学級担任の外国語の授業に関する関心だけでなく知識や技能が低下していることが分かった。また、専科教員や教科担任がいない学校に異動した際に、外国語の授業を全く行ったことがない教員がいることは大きな課題だと分かった。一方、中学校の先生の中には、小学校で行われている外国語の授業について関心が薄く、中学校の英語とは別物だと考えている人もいた。

小学校教員と中学校教員が情報を共有する場や機会がほとんどないことが課題として上げられたことから、今後情報共有する方法を模索し、小中連携の意識の高まりを期待したい。

(イ) B 「ICTを用いたアクティビティ」

効率の良い学びを展開するために、教員が単元構想の計画を立て、「身に付けたい力」「ICTを何のために、いつ・どこで・誰が・何を・どのように活用するのか」を明確にした。

教科書やワークシートを中心にしていたときの「時間がかかる」「管理が大変」「個人差が出る」等の課題については、ICTを使うことによって克服し、より効率的で児童生徒の“伝えたい”という思いを引き出せるようになったことが大きな成果として上げられる。

これからの課題としては、個々の教員が作成したタブレット端末の機能やアプリを使ったデータの共有をしたり、ICTを使うことが目的とならないように授業作りをしたりすることが考えられる。また、ICTはユニバーサルデザインの観点からも、どの児童生徒にとっても理解しやすく考えやすいものにするために、さらに有効活用していく必要がある。

(ウ) C 「はずむ Small Talk」

語彙が少なく思い通りに会話が進まないという小学校、テストで点が取れても会話ができないという中学校の課題のもと、毎時間の帯活動として時間を設定し、話すことに慣れるようにした。また、語彙を提示して積極的に使うようにさせることで、会話を続ける素地作りを行った。児童生徒のアンケート結果からは、話そうという意欲が向上し、実際に話すことができる時間が長くなったことが分かった。課題としては、指導する教員の指導技術不足が否めず、テーマ設定も難しいことや、児童生徒が自分の思いを伝えるための語彙がないためスムーズに会話できないという課題が明らかになった。小中が連携し、9年間を通して英語を使って会話することへの抵抗感が少しでもなくなるように、意欲が高まるようなテーマを設定したり、語彙が少なくても会話が続くような支援や工夫を研究をしたりしていく必要性を感じた。

4 成果と今後の課題

推進委員が大幅に交替し研究を進めていくことが大変厳しい状況ではあったが、昨年度までの研究の流れを受け3つのテーマごとに推進委員が実践してきたことを報告した。テーマに基づいた授業実践をすることで、深く研究するよい機会となった。

今回の一斉研究報告会では、3つのテーマを2部制で報告したため、聞くことができなかったブースがあったことが課題として上げられた。来年度は、オンライン配信についても検討していく。

今後は、小中連携を意識した授業づくりの実践を積み重ね、小笠地区内で共有を図っていきたいと考える。また、教科書が変わり、扱う内容が大幅に増えたため、教科書を用いた指導方法についても研究を深めていきたい。

1 1 生活科・総合的な学習研究部

部 長 澤崎 忍
副部長 鈴木 喜多朗
副部長 金子 紋也

1 研究経過のあらまし

〈研究テーマ〉 **気付き かかわり よりよく生きる 生活科・総合的な学習**

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」（2021）において、探究的な学習や体験活動等を通じて「協働的な学び」を充実させることが示された。生活科や総合的な学習では、特に探究のプロセスを重視していることから、その重要性が一層高まっている。しかしながら、現場からは探究的な学習の単元構成や地域連携、評価の難しさを訴える声が聞かれ、指導者によって温度差があるのが現状である。そこで本研究部では、これまで、ねらいや付けたい力を明確にすることで、子供が主体的に活動する姿や、思考ツールを活用して意図した思考の発揮を促すことで、よりよく問題解決をする姿を一斉研究報告会の授業で具体的に示してきた。また、主任研究委員が授業アドバイザーとして各校を訪問することによって、小笠地区全体の生活科・総合的な学習の充実を図ってきた。

今年度は、昨年度に引き続いて生活科を窓口とし、「どのように探究的な学習を仕組むか」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿とのつながりを踏まえ、ルーブリックを活用して生活科における主体的に学習に取り組む姿をどのように評価するか」をねらいとして研究を進めている。

2 今年度のあゆみ

（1）研究推進委員会

期 日	活 動 名	会 場	活 動 内 容
5/16（月）	第1回研究推進委員会	小笠教育会館	・研究テーマ、活動方針決定
6/7（火）	夏季研究大会準備会	小笠教育会館	・夏季研究大会の運営、役割分担
6/30（木）	第2回研究推進委員会	小笠教育会館	・一斉研の授業案検討①
8/4（木）	夏季研究大会	オンデマンド配信 及びライブ配信	・実践発表 ・講演（静岡大学 田宮 縁 教授）
9/1（木）	第3回研究推進委員会	小笠教育会館	・一斉研の授業案検討②
10/14（金）	第4回研究推進委員会	小笠教育会館	・一斉研の授業案検討③
11/9（水）	一斉研究報告会	掛川市立中小学校	・公開授業 及び 研究協議
11/24（木）	第5回研究推進委員会	小笠教育会館	・今年度の反省および次年度の運営

（2）静教研夏季大会（小笠・榛原大会）

ア 研究主題 「気付き かかわり よりよく生きる」

イ 実践発表

小学校 生活科 「探究的に活動し、自己実現できる子を目指して」

小学校 総合的な学習 「自分自身を振り返る場の設定～振り返りを生かす～」

中学校 総合的な学習 「探究のプロセスを身につけ、主体的に地域の未来を考える生徒の育成」

ウ 講 演 「ESD と生活・総合～SDGs デジタル絵本プロジェクトから学んだこと～」

静岡大学 田宮 縁 教授

今年度は、新型コロナウイルス感染が拡大したために、オンデマンドとオンラインによるハイブリッド開催となった。講師による指導講評及び講演（オンライン配信）までにアップロードした実践発表の動画（オンデマンド配信）を視聴できるように準備をした。実践発表や講演内容から、どの発達段階であっても、地域の材を生かしつつ子供の主体性と学びの実感を中心として計画・実践を繰り返すことで、子供たちが「気付き」を得て、目の前の教材、事象、子供たちの学びに積極的に「関わり」、

子供たちと共に「よりよく生きる」未来を創造する生活科・総合的な学習となることが分かった。

3 一斉研究報告会

掛川市立中小学校 芥川 梓教諭 生活科「えがおいっぱい だいさくせん」(第1学年)

(1) 単元計画

「家族を笑顔にする」ことを目標に、単元の中で3回の「おしごと」に挑戦し、家族の一員として自分の役割を進んで行うことができるようになることを目指す。

「おしごと」実践後には振り返りの時間を設定し、さらに家族を笑顔にできるような取り組み方を考えていく。最後に報告会を行い、自分の頑張りを認められることで達成感や充実感を味わえるようにする。



(2) 本時の評価基準(ルーブリック)

A	ワークシート及び作戦の宣言・報告において、以前の振り返り時と比べて、他者との関わりの中での成長の実感及び意欲に関する表現(記述・発言)が増えている。
B	ワークシート及び作戦の宣言・報告において、以前の振り返り時と比べて、他者との関わりの中での成長の実感及び意欲、または個人内の成長の実感に関する表現(記述・発言)が増えている。
C	ワークシート及び作戦の宣言・報告において、実感及び意欲に関する表現をしていない。

(3) 研究協議及び指導助言

ルーブリックを作り、評価基準を明確にすることにより、子供たちの表れをより豊かに見取ることができた。また、評価基準を意識した教師の子供たちに対する支援の方法や関わり方により、本単元の課題である「自立心」が育まれた。その結果、A評価の表れも多く見られ、子供たちの表れもとても豊かなものとなっていた。しかし、子供たちの自立心は常に右肩上がりに成長するものではない。すぐに良い表れが見られる子もいれば、そうでない子もいる。教師はすぐに結果が出ることを求めてしまうが、長いスパンで成長のタイミングを見逃さないことが大切である。

生活科・総合的な学習で身につけた力は、教科横断的に活かされていくことが多い。だからこそ、本単元で育まれた力が、各教科等、他の学年でどのように生きていくのかを把握し、教師はそれを意識していくことが重要である。

4 成果と今後の課題

- 「主体的に学習に取り組む態度」を量的に評価するためのルーブリックを切り口として研究を進めることで、「成長の実感や自信」を評価できる子供の記述を質的に精査し、評価と指導の一体化を進めることができた。
- 今回の研究で高めたい資質として焦点を当てた「実感や自信」は幼児期の終わりまでに育てて欲しい10の姿の中の「自立心」と深く関わりあっていることが明確となった。自立心のような資質を高めるためには、生活科の授業を点で捉えるのではなく、幼児期から小、中学校へとつながる同一線上にあることを意識することが大切だとわかった。
- △ 今回の一斉研究報告会も研究委員主体の開催となり、研究の成果を広める機会を十分に得られないまま3年が経過した。集合形式での開催が実施できなくても、オンラインやオンデマンドで研修に参加できるような体制を整え、生活科や総合的な学習が資質・能力を育成するカリキュラムの核となるような実践を広めていきたい。

12 特別活動教育研究部

部長 岡本 裕之
副部長 落合 麻央
副部長 犬塚 祐貴

1 研究経過のあらまし

(1) 研究テーマ

高めよう自治力！ 生かそう児童生徒の主体性！

(2) 研究にあたって

昨年・一昨年のコロナ禍で、教育活動の制限や昨今の「働き方改革」を受けて、特別活動は工夫を凝らす必要性に迫られた。一方で、児童生徒の人格形成において特別活動が果たす役割の重要性と意義が再認識されている。より良い集団生活を送るために単に楽しさのみを求めたり、話し合いだけに終始したりするのではなく、児童生徒が集団や自分の生活上の課題解決に向けて、合意形成や意思決定をする過程を通して、より良い生活や人間関係を築こうとする自主的・実践的な態度を育てたいと考えた。それとともに、自己の生き方について考えを深め、自己を生かす能力を養うために、小笠地区ではテーマを「高めよう自治力！生かそう児童生徒の主体性！」とした。

今年度の一斉研究報告会では、久々に授業参観を通しての協議を行った。コロナ禍で学年間のつながりが薄い実態を踏まえ、話し合いを通して、児童生徒の主体性を引き出しながら、学校が活気づき、子どもたちが生き生きと活動する実践の推進を行っていききたい。

2 今年度のあゆみ

(1) 研修会・会合

活動名	期日	会場	内容
第1回研究推進委員会	5月16日(月)	小笠教育会館	・本年度の方針及び年間活動計画 ・本年度の組織及び役割
第2回研究推進委員会	6月2日(木)	小笠教育会館	・静教研夏季研究大会要項等報告 ・静教研夏季研究大会発表原稿検討
第3回研究推進委員会	7月5日(火)	小笠教育会館	・静教研夏季研究大会発表原稿、資料の検討
第4回研究推進委員会	10月11日(火)	小笠教育会館	・一斉研究報告会指導案検討
一斉研究報告会	11月9日(水)	横須賀小学校	・横山教諭 学級会公開
第5回研究推進委員会	11月18日(金)	小笠教育会館	・小笠の教育の原稿検討 ・次年度に向けての概要確認 ・研修のまとめ及び引き継ぎ

他に一部推進委員参加の元、研究部会を2回行った。

(2) 研究大会への参加

静教研特別活動研究部夏季研究大会への参加

菊川市立岳洋中学校 落合麻央教諭が「伝統を引き継ぐために～『心を一つに』を目指して～」をテーマに発表した。

3 一斉研究報告会

(1) 公開授業

ア 授業者・会場 横山仁美 教諭
掛川市立横須賀小学校 6年1組

イ 活動名 卒業プロジェクト
～第一弾：他の学年ともっと仲良くなる～



ウ 本日の目標

2年生ともっと仲良くなるためには、どのようなことに取り組みばいいのかを話し合うことを通して、多様な意見を生かして合意形成を図り、解決策に取り組む方法を考えることができる。

【思考力、判断力、

表現力等】

エ 授業内容

6年生の学級会の公開授業であった。これまでに子どもたちは卒業という節目に向けて、どんな思いを、どんな姿で下級生に残していきたいのかを話し合ってきた。しかし、コロナ禍の制限も相まって、他の学年との関わりをあまりもつことができずにいた。このままでは下級生に思いを伝えることができないと考えた子どもたちは、卒業までに下級生との思い出をつくりたいという思いから、以下のように議題や提案理由を設定して話し合い活動が行われた。

議 題	2年生と仲良くして楽しませよう。
提案理由	卒業までに他の学年ともっと仲良くなりたいという意見がクラスで出ました。前は1年生ともっと仲良くなるための集会ができました。そこで今回は前回の経験を生かして2年生ともっと仲良くなるための集会をやりたいと思い提案します。
小柱1	2年生と仲良くして楽しんでもらうには、何をしたらいいのか。
小柱2	2年生に楽しんでもらうためには、どんな工夫ができるのか。

小柱1では、「2年生と仲良くして楽しんでもらうための内容」について、個々の意見を事前にミライシードのオクリンクに送り、全体で意見を共有した状態で話し合いを行った。また、1年生との活動の成果と課題や2年生が好きな遊びのアンケート結果なども踏まえて、どのような内容がいいのかを理由を付けて発表し合った。「〇〇さんの意見はどういうことですか。」と聞き返し、相手の考えを受け止めて引き出そうとする姿が見られた。出し合った意見を集約していく際には、「意見をまとめる方法」という資料を示し、「ハーフ&ハーフ（2つの考えを合体させて1つにする）」や「ハッピーセット（メイン1つとサブをいくつか決める）」などそれぞれのアイデアを否定することなく、より仲良く楽しんでもらえる内容を追究していった。

小柱2では、小柱1で決まった「おにごっこ」と「ドッジボール」を楽しんでもらう工夫について話し合った。1年生との活動の振り返りを生かし、「ルールを分かりやすくすること」「2年生と6年生の関わりを多くすること」「2年生の体力面」という視点を意識して話し合った。

どの子どもも自分事として考え、真剣に話し合う姿が見られた。特に司会の2人の子どもは、最終的な決定を多数決で決めないように、全体を見て様々な意見を引き出そうとしていた。発言が苦手な子どもにも「何が良かったと思った。理由は言わなくていいよ。」など、優しく伝える場面があり、それを学級全体が温かく見守る姿が印象的であった。クラスの温かい雰囲気や基盤に、他者の意見を受け止め、その上でよりよい方法を追究する姿に今までの話し合い活動の積み重ねを感じた。



(2) 成果と今後の課題

- 話し合いに対する教師の的確な支援と評価について考え、実践を積むことができたこと。
- 単元を通して期待する姿を設定し、子どもが経験を生かして課題に向き合う姿が見られたこと。
- 他教科とのカリキュラムマネジメントを意識した単元計画を立てることができたこと。
- ▲合意形成の拠り所となる視点を吟味していくこと。
- ▲ICTのより効果的な活用について、実践を通して検討していくこと。

13 道徳教育研究部

部長 袴田 充子

副部長 伊藤 愛

副部長 石津 まりこ

1 研究経過のあらまし

(1) 研究テーマ

考えを深め合うストーリーのある授業

(2) 研究にあたって

道徳教育研究部では、一昨年度から「考えを深め合うストーリーのある授業」をテーマに研究を進め『問題意識を喚起する工夫』『自分ごととしてとらえて考えていくための手立て』『思考を深める発問や問い返し』『ICTを活用した授業づくり』について考察した。本年度は各委員の実践を共有したり、地域で活躍する人物の生き方に着目した自作教材を元に一斉研で授業公開をしたりした。

2 今年度のあゆみ

オンラインや集合形式で研究推進委員会を行い、主に2点について研究を行った。

- ① お互いの実践報告（実践した道徳の授業の概要、「小さな道徳」で扱った資料、「道徳の授業づくり」について教職員に配布した資料等）を共有し、よりよい道徳教育について考察。
- ② 一斉研究報告会の授業に向けた協議（人物を扱う上での留意、ねらい、中心発問や補助発問）

3 一斉研究報告会 11月9日（水）

(1) 授業者 鈴木 駿志 教諭（掛川市立原野谷中学校 3年B組）

(2) 主題名 困難や失敗を乗り越える強い意志 A-4 希望と勇気、克己と強い意志
教材名 「壁をこえた先にあったもの～オリンピック渡辺祐香～」(自作教材)

(3) ねらい 渡辺祐香さんが、目標の実現に向けて立ちちはだかった壁を乗り越えるための原動力となったものについて考える活動を通して、これから困難に直面したときには、強い意志を持って様々な努力を積み重ねようとする心情を育てる。

(4) 授業の展開

中学3年生という義務教育最終段階にある生徒たち。自分でよりよい生き方について考えていく過程で「壁」に直面し、「孤独感」「逃げ出したい気持ち」「諦め」等の気持ちも感じるであろう。そのような生徒に対し授業者は、これからの受験やその後の様々な場面で現れるであろう「壁」を乗り越えるために、必要な努力や強い意志とは具体的にどのような気持ちや考え方なのかを気付かせたいと考え、授業を構成した。授業を行うにあたり、授業者は事前に資料を配布し、さらに Google フォームで内容の確認や、生徒の意識調査を行った。教材の内容理解も含め、授業前に全生徒を「授業の土台にあげる」試みをした。これにより対話活動に十分時間を確保することができた。



導入では、内容の確認を簡単に行い、「自分の事を好きか」「自分に誇りをもてるか」について4段階でとったアンケート回答を提示した。展開前段では、「壁」を乗り越えるために渡辺さんがどんなことをしてきたのかを押さえた後、中心発問「壁を乗り越えるためのいろいろな努力をするために、どういう気持ちや考えで取り組んでいたのか。その原動力になったのは何か」について自分でキラリノート（道徳ノート）に記入をしていった。個人で考

えた後、行動と気持ちがどんなふうに繋がっていたのかを Jamboard を用いて班で話し合い、それから、班の代表者の発表により全体でも共有した。その後、「なぜ諦めない気持ちをもてたのでしょうか。諦めたっていいじゃないですか。」と問い返した。「夢?」「好きだから?」と反射的に意見が出たが「ちょっと考えてみてください。」と班での対話を指示した。すると、「自分だったら〇〇だけ」「例えば〇〇とかしていたとするでしょ。それって～」のように、人間の弱さ(人間理解)に触れる意見や、自分の体験や周りの友達の表れ等と結びつけて述べている姿が見られた。班での対話の後「14年間生きてきて、こんなに考えたのは初めてだ。大発見。考えるって楽しい。」と話した生徒がいた。まさに、本授業が「考え、議論する道徳」を体現していたといえる。



展開後段で「これから自分が壁に直面したときに大切にしたいこと」についてキラリノートに自分の考えをまとめた。「努力をするためには、努力することを嫌いにならないことが大切」「自分で勝手に限界を決めない」「まず前向きに。自分を変えられるのは自分の強い意志」「みんなも同じように壁に当たると言うことが分かった。」「苦労の先にある光を信じていきたい」等の言葉が書かれていた。終末では、渡辺祐香さんが授業者の知り合いとわかり、渡辺さんに対する生徒の興味が、ぐっと深まったところで、授業者が本人にインタビューした内容をスライドで提示した。渡辺さんのメッセージ性のある言葉によって、さらに深まりを生むことができ、余韻をもって授業を終えられた。

4 成果と今後の課題

実践共有や一斉研授業の検討・事後研修を行う中で成果と課題があげられた。

- ・問題意識を喚起するために、道徳授業の本質を見つめることが大切。「教材の事前配布」「教材を途中で切る」「発問の文言」等に、制限を加える傾向も見られたが、道徳の授業とは生き方を考えていく時間であるので、そのために何が必要かを考え、行うことが大切であることを確認できた。
- ・自分ごととして考えたり、友達と対話したりできるようになるために、小学校低学年から自分の言葉で考えを話す経験を積み重ねていく必要がある。「人間理解(人間的な弱さ)」について安心して語り合える温かな学級経営が、授業づくりの土台となる。また、地域で活躍する人を身近に感じられる授業は、子供にとって生き方を考えるチャンスとなる。実態に合わせたねらいの設定、教材開発についてもさらに研究を深めたい。
- ・ICT を活用することで、一人一人の考えが可視化される。自分の考えを表出したり、友達の考えを知ったりするときに有効である。情報を共有し、分類や比較ができるので、それらをもとに対話することができる。今後も、ICT を交流場面で効果的に活用する方法について考えたい。
- ・問い返しをした後が、授業のねらいに迫るところとなる。ストーリー性のある授業とは、教師が問い返しを行い、ねらいに向けてどうまとめまで続けていくのかというところが大切である。子供たちが「はっと一瞬止まる」「間があく」という時、今まで思っていたことから自己を見つめ直したり、その価値の大切さや難しさについて深く考えたりするきっかけとなっていく。資料や教材から離れて自分の内面から出てくる言葉を生み出す発問や授業構成を継続研究していく。

先生方からも要望があったが、「質の高い問い返し」や「教材の共有」等、道徳の授業づくりについて、小笠地区全体で、それぞれの実践や資料の共有をすることができる場ができ、「道徳の授業づくりが楽しい」と校種を超えて話し合えるような場を設けていける手段を考えたい。

14 生徒指導研究部

部長 菅沼 一浩
副部長 栗田 信弥
副部長 石橋 克祥

1 研究経過のあらまし

- (1) 研究テーマ「自己肯定感を高める生徒指導」
- (2) 研究にあたって

今年度は静教研生徒指導研究部の研究主題「一人一人に生きる力を育む生徒指導」を受け、菊川市立岳洋中学校の実践をもとに「自己肯定感を高める生徒指導」について研究を進めた。

2 今年度の歩み

活動名	期日	活動内容
第1回推進委員会	5月16日	今年度の活動について
第2回推進委員会	6月13日	月例報告の入力と分析
第3回推進委員会	7月12日	一斉研究報告会最終確認・準備
静教研夏季研究大会	8月4日	講演：NPO法人アサーティブジャパン認定講師 公認心理士 谷澤 久美子 氏 発表者：菊川市立岳洋中学校 吉田 順平 教諭 テーマ：『魅力ある学校づくり』を生かした生徒会活動の実践
第4回推進委員会	9月8日	一斉研究報告会最終確認
一斉研究報告会	10月17日	講演：菊川市立総合病院 中島 隼也 氏 発表者：菊川市立岳洋中学校 吉田 順平 教諭 テーマ：『魅力ある学校づくり』を生かした生徒会活動の実践 グループ協議
第5回推進委員会	1月20日	一斉研究報告会の振り返り 来年度の研修について

3 一斉研究報告会

- (1) 講演 菊川市立総合病院 小児科 中島 隼也 氏
演題 「不登校児童への対応について」

要旨

不登校は疾患の一つであり、通院をためらわないこと。不登校は発達障害や知的障害と関連することがあり、心身症と捉えること。病院では不登校児童生徒に精神疾患やいじめなどの外因、抑うつ傾向が見られる場合は完全に休養させる。そうでなければ登校刺激をする。不登校の理由の一つに起立性調節障害がある。その場合は、まずは生活習慣の改善を勧める。起立性調節障害が原因となって不登校になるケースもあれば、不登校が原因となって起立性調節障害になるケースもあり、どちらも原因に成り得る。不登校には前兆期（前期）、停滞期（中期）、回復期（後期）という3つの期間がある。前兆期は注意しながら登校刺激をすることで早くに回復させる期間。停滞期は楽しくて時間を忘れるような体験が必要。スマホ依存、ゲーム依存は結果であり、そこまでエネルギーが落ちているということ。また、ゴールを考える時期である。登校刺激は不要だが、教師はつながりを保つこと。まわりが受け入れてくれるという安心安全な居場所をつくることも大切。回復期はスモールステップでの行動療法が効果的。校門まで行く、行く回数を増やす、靴箱まで行く、そしてその成功体験を積み重ねる。失敗もあるが、教師は子どものステップを待てば良い。学校にお願いしたいのは、外因の検索である。いじめや虐待はあって当たり前と捉え、それを言い合える職場環境づくりが必要。事例の報告、共有が大切である。

(2) 実践発表 菊川市立学洋中学校 吉田 順平 教諭

テーマ 『魅力ある学校づくり』を生かした生徒会活動の実践

～学校生活への充実感を高め、明日も行きたいと思える学校を目指して～

要旨

「魅力ある学校づくり」とは、『学校が明日も明後日も行きたいと思えるような魅力的な場所になること』であり、生徒一人ひとりの考えや思いをもとに教育活動の見直しを行うことで、自己肯定感を高めるだけでなく、新規不登校者の発生抑制にも繋がるという取組である。本研究は、生徒に「学校は楽しい」、「みんなで何かをするのは楽しい」、「授業に主体的に取り組んでいる」、「授業がよくわかる」の4項目でアンケートを行い、その結果から実施した教育活動の成果や課題を分析・考察するなど、PDCA サイクルを回しながら教育活動の見直しと改善を図った。生徒会活動に焦点を当て、実践内容は生徒会活動 PDCA サイクルでの運用をした。P「各専門委員会のプランニング」…各専門委員会の目標を見直し、改善したことにより委員会の目標が明確になり、活動内容の精選も行われるようになった。D「各専門委員会の具体的なしかけ」…ステージアンケートの結果から取組を考えたり、考察をして次の取組を考案したりした。C「生徒会アンケートから生徒の声調査を実践」…Dの具体的な取組が、全校生徒にどのように浸透しているのかをアンケート調査により測るとともに、生徒一人ひとりの生徒会活動への参画意識向上を目指して「生徒会アンケート」を実施した。A「結果を受けて次のアクションへ」…アンケート結果を受け、活動内容の改善に取り組んだり、リーダー会議で意見交換を行ったりし、各委員会の目標達成度の向上につながる新たな取り組みを生み出した。本研究の成果として、「リーダー意識の向上と深化」、「フォロワーの意識向上」、「生徒会への参画意識の向上」、「生徒への充実感」がみられた。特に、「リーダー意識の向上と深化」は、アンケート結果より7割が強肯定の達成度を示し、大きな成果が得られた。一方、「フォロワーの意識向上」、「生徒会への参画意識の向上」に関しては、向上がみられたものの5割程度の達成度に留まった。以上の結果から、学校生活への充実感が高まり、自己肯定感の向上に繋がったものと言える。

(3) グループ協議

- 各校における自己肯定感を高める生徒指導の紹介
- 自己肯定感を高めるよりよい取組を模索する

4 成果と課題

- 児童・生徒の声を教育活動に生かすことで、子どもたちが学校をつくる実感をもつようになり、その実感が自己肯定感の高まりに繋がることがわかった。
- 医療の立場としての不登校児童への対応と、医師が期待する学校への不登校対応を知ること
で、不登校児童・生徒との関わり方に新たな視点をもつことができた。
- △児童・生徒の声をどのように教育活動に生かすのか。さらなる模索が必要。